

フェリクスの前でのパウロの弁明

パウロに対するユダヤ教熱狂派の刺客団による暗殺計画が発覚し、そのことが密かにローマの司令官に伝えられたとき、司令官リシアは、これ以上パウロをエルサレムにとどめることが危険であり、またエルサレムでは公正な裁判を受けることが不可能であると判断し、彼をカイサリアにあるローマ総督府に送ることを決心した。こうして使徒パウロは、470名からなる重装備のローマ軍兵士に護送されて、66マイル離れたカイサリアのローマ総督府に送られた。総督フェリクスは軽い取り調べの後、エルサレムからパウロの告訴人が到着するまで、彼を宮殿内の拘置所に拘置しておくよう命じた。

五日後、大祭司アナニアは、長老数名とテルティロという弁護士とを連れて下り、総督にパウロを訴え出た。大祭司がエルサレムの外に出向くということは通常は考えられないことであつたといわれ、それ故、アナニアがわざわざエルサレムから下って来たということはユダヤ教当局者側のパウロ抹殺の相当の決意の表れであつた。

原告弁護人のテルティロは激しい語調でパウロを騒乱罪のかどで総督に告訴した。「この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の首謀者であります。この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました」(24：5、6)。

「ナザレ人の分派」(異端/口語訳)とは、ナザレ人イエスをメシア(救い主)と信じる異端グループという意味である。今日でも、ヘブル語ではクリスチャンのことを“ナザレ人”という。イエス・キリストおよび彼に従う者に対する一種の軽蔑用語である。

パウロはこの告訴を根拠のないものとして力強く否定する。そして、問題の真の争点はナザレのイエスをメシアと信じる信仰にあること、この信仰はユダヤ人が長い旧約の歴史の中で、先祖伝来抱いてきた信仰と希望の路線にあるもので、決してそれと矛盾するものではないこと、異端どころか、旧約の「律法と預言者」の教えることの成就以外の何ものでもないことを強調する(14～16節)。

総督フェリクスは、ユダヤの王ヘロデ・アグrippa一世の娘ドルシラを妻にしていたこともあって、パウロの説くキリスト教信仰について相当の知識を持っていた。それ故、ここでの問題の核心は騒乱罪という治安上の問題ではなく、ユダヤ人の信仰問題であり、ローマ政府が関与すべきものではないこと、従ってローマ法廷でパウロを裁く必要のないことを知っていた。

しかし、パウロを釈放すれば、ただでさえ自分に対して不満をもっているユダヤ人の感情を刺激し、政治的摩擦を助長する可能性がある。それは政治的に不利だと判断した。そこで彼は、ユダヤ人の歓心を買おうと思って、パウロを釈放することを拒み、その結果パウロは二年間もカイサリアに幽閉されることになってしまった(27節)。

<VoxPopuliVoxDei>という言葉がある。「民の声は神の声」という意味である。これは、大衆の声は賢明であると、民主主義の原則のように解されることがあるが、自分の信念を曲げて人の声に迎合してしまう人間の罪をも表している。神の声を神の声として恐れなければならないのに、人間の声を神の声のように恐れて、それに迎合してしまう罪である。フェリクスはそのような人間であつた。イエスを十字架に渡した総督ピラトのように、保身のために人の声に屈し、ついにパウロを二年も牢獄に監禁してしまうのである。